

松尾先生と国文科

宮 本 三 郎

松尾聰教授は昨年三月を以て、学習院大学を停年により御退職になった。先生は東京府立一中、第一高等学校を経て昭和三年、東京帝国大学文学部国文学科に御入学、「浜松中納言物語」及び「夜の寢覚」に関する新発見資料に基づく精細な研究成果を以て、当時すでに学界に寄与する所あつた卒業論文を提出されて昭和六年御卒業後は、さらに大学院に学んで研究を続けられ、法政大学専任講師を経て、昭和十一年四月、学習院専任講師として御来任、ついで教授となられ、旧制中等科・高等科に於て研究と教育に尽瘁せられたが、やがて第二次大戦の勃発、戦争の熾烈化につれ、文字通り、日夜学習院と生活を一体化された、その御苦勞は公私ともに言語に絶するものがあつた。この間の事情の一端は、先生の克明な記録「敗戦前後日記抄」(久松潜一先生の御ことば)所収)などによつて窺われる。

戦後、昭和二十四年四月、学習院は私学の新制大学として発足し、その文政学部(のち昭和二十七年、文学部と政経学部に分れる)の文学科の中に国文学専攻のコースが置かれたが、松尾先生は東条操主任教授を輔けて尽力され、高邁な構想のもとに、久松潜一・山岸徳平・麻生磯次・時枝誠記らの諸先生ほか、国語国文学界の錚々たる教授陣容を整えて、わが国文学科の確乎不動の基礎を築かれたのである。先生の意図された「みだりに新に走らず、奇を衒わず、厳格な実証的精神を重んずる」地道な質実な学風は、今日の国文学科にもそのまま受け継がれている。

二十八年四月には大学院修士課程設置、その人文科学研究科に国文学専攻が置かれ、ついで三十二年四月、文学部内に国文学科は正式に独立し、四十年四月には大学院博士課程が設けられ、国文学科はますます順調な隆盛発展を遂げて今日に至

っているが、その草創期には志願者数もいまだ少なく、経営面から先生が種々心を砕かれる事もあったように伺っている。そうした雑務繁忙の中で、早く昭和十三年七月から満四年間「文芸文化」誌上に連載された「平安朝散佚物語攷」は学界の注目を浴びたのを初め、先生の平安時代物語研究は着々と推進され、三十年六月には『平安時代物語の研究——散佚物語四十六篇の形態復原に関する試論——』を刊行、三十二年四月には、「平安朝散佚物語の研究」によって東京大学から文学博士の学位も受けられた。また、岩波日本古典文学大系『落窪物語』、同『浜松中納言物語』ほか、御専門の平安文学を中心に綿密な注釈や創見に富む論考を次々に発表せられ、四十三年四月には、八ボ組、六百頁を超える『平安時代物語論考』を刊行された。なお、平安文学に限らず、先生はひろく、「ことば」や解釈文法への御造詣も深く、その御著書も数多くある。これらは別に本誌に先生の業績目録として掲げられるはずだし、また先生の御研究の専門的内容の一つについては、浅学にして専攻を異にする私には、到底誤りのない評価などなし得るところではないが、ただ先生の精勵篤実にして、事を苟くもしない御性格と相俟って、その学風は周到精緻を極めて、それがすべての御業績を通じて終始一貫している点は、ここに指摘せられよう。昭和三十三年、第一巻を出されて以来、公務繁忙などの事情で断続的に刊行されて来た『源氏物語全注釈』のお仕事も今後先生のライフワークとして完成が見られるように期待すること切なるものがある。

学習院は昨五十三年十月、創立百周年の式典を挙げたが、先生は昭和十一年以来、実に勤続満四十二年、学習院とその半分近い歳月を歩みをとものにせられ、ことにわが国文学科創設に力を尽され、また先生の御発企により、昭和三十年六月、学習院大学国語国文学会も創立総会が開かれ、翌三十一年一月、本学会誌も創刊されて今日まで号を重ねている。

本誌が先生の御退職に当り記念号を特集するということで稿を需められるままに、先生の御功績をたたえ感謝を捧げるべく、燕文を連ねた次第である。

幸いに、先生は御健康で壯者を凌ぐお元氣さであられるが、今後一層加餐せられ、お仕事の大成を旨さず日々を、俗務から解放されて悠容と送られるようお祈り申しあげて筆を擱く。

昭和五十四年一月十日